

# SDS の因子構造の検討

永田 正明

第一工業大学 共通教育センター

## 要旨

SDS は否定的な表現 10 項目と肯定的な表現 10 項目からなる。因子分析をすると、感情に関する否定的な項目が因子としてまとまり、認知に関する肯定的な項目がもう一つの因子としてまとまる傾向がある。つまり、「感情因子」と「認知因子」の 2 因子に分かれるのか、「否定的表現因子」と「肯定的表現因子」の 2 因子に分かれるのかははっきりしない傾向がある。本研究でも健常な高校 1 年生に対して SDS 日本語版を実施し、上述したような「否定的表現(感情)因子」と「肯定的表現(認知)因子」の 2 因子に分かれる構造をしているのか検討したところ、同様な「否定的表現(感情)因子」と「肯定的表現(認知)因子」の 2 因子に分かれる結果を得た。

**Key Words:** SDS 日本語版, 逆転項目と正項目

## 1. はじめに

うつ病は大人にとっても子どもにとっても、人生で最も出会うことの多い精神疾患であろう。また、うつ病とまでは言わなくても気分的な落ち込みや一時的に手つかずの状態、いわゆる抑うつ状態を経験したことは誰しもあるのではなからうか。川上(2003)による諸外国のうつ病疫学調査結果によると、一般人口中におけるうつ病の有病率は、6 か月単位で 2~7%, 生涯有病率では 4~15%程である。一方、国内におけるこういった調査は遅れてはいるものの、厚生労働省による平成 12 年の調査結果から 15~24 歳の青年期と高齢者において抑うつ得点が高かった。このように青年期に抑うつ気分が高まることの背景は容易に想像ができる。学校という集団社会の中で、個人の学力や好き嫌いに関係なく課せられる学習活動や友人関係の構築や学級集団への所属自体といったことに対し、うまく課題をなし遂げたり関係づくりができなければ、抑うつ気分が高まったり不登校や問題行動といった手段で回避したり防衛機制が

働いたりする結果となろう。

抑うつを理解し状態を把握するための手段として、自己記入式評価尺度が大人数に対して簡便に利用できる。うつ病のスクリーニングテストとしての役目や医学的診断の補助であり、症状の聞き漏らしを防ぐ目的もある。

抑うつ症状を簡便に測定評価でき、臨床現場でよく利用されているものに Zung(1965)の自己評価式抑うつ尺度(Self-rating Depression Scale: SDS)があり、国内では SDS 日本語版(福田・小林, 1973)が抑うつ症状(気分)の測定によく使用されている。

## 2. 目的

SDS は抑うつ感情(2 項目)、身体的症状(8 項目)、精神的症状(10 項目)を質問する合計 20 項目から構成されている。またその質問文の表現に着目すると、否定的な表現 10 項目と肯定的な表現 10 項目(逆転項目としてある)となっている。ところが因子分析をすると、感情に関する否定的な

項目だけが一つの因子としてまとめ、認知に関する肯定的な項目だけがもう一つの因子としてまとまる傾向が多くの研究結果でわかっている。つまり、因子が「感情因子」と「認知因子」の2因子に分かれているのか、「肯定的表現因子」と「否定的表現因子」の2因子に分かれる傾向があるのかがはっきりしない点がある。

本研究では高校生においてSDSを因子分析した場合、上述したように「肯定的表現因子(認知因子)」と「否定的表現因子(感情因子)」の2因子に分かれる構造をしているのか、それともこれらとは異なる2因子構造、あるいは3因子構造をしているのか確認することを目的とする。

### 3. 1 被験者

同一県内5校の高校1年生734名(普通科と専門学科に在籍する男子526名、女子208名)

### 3. 2 調査時期等

調査内容や方法、調査の意義と目的などを各学校長に説明・依頼した上で、実施許可を得られた同一県内5校の高校1年生に対してSDS日本語版を2001年12月に実施したところ有効回答は734名であった。バイアスを少しでも避けるため「SDS」や「抑うつ」といった文章表現を「活力に関する調査」などとし、記名式で実施した。

### 3. 3 質問紙

本研究ではSDS日本語版(福田・小林, 1973)を使用するが、性欲に関する項目「まだ性欲がある」は高校生には刺激があり防衛反応が予想されるため、更井(1979)や大谷ら(1999)が使用している項目「異性に関心がある」に変更したものを使用した。また、漢字には読み仮名をふり誤解を防ぐ

ように工夫した。SDSは抑うつ症状を定量化するため、研究者の報告した因子分析結果をもとに20項目から構成され、「1点: ない」から「4点: いつもある」までの4点尺度で回答するため、合計が20点から80点までとなる。SDS日本語版(福田ら, 1973)では、うつ病者群・神経症患者群・正常者群を被験者としてSDSを実施し、信頼性と妥当性を確認している。

## 4. 結果

Table 1 に男女込みでSDS 20項目を因子分析した結果を示した。固有値1.0以上で因子の解釈妥当性から2因子解が妥当であると判断した。因子1は逆転項目であるいわゆる肯定的な認知に関する質問項目のまとめとなり、因子2では否定的な感情に関する質問項目が抽出されている。これら2つの因子から外れた項目は、No 6「異性と一緒にいると楽しい」、No 7「やせてきたことに気がつく」、No 8「便秘している」の3項目であった。またTable 1の右端に大谷ら(1999)が検証した因子分析結果を掲載したが、比較してわかるように因子的には非常によく似た構造であり、因子負荷量もほぼ近い値を示している。大谷らの被験者の内訳は、高校1年生828名、2年生615名、3年生654名、全体で2097名(男子1471名、女子626名)であり、本研究被験者と男女比はほぼ同じである。被験者の校種・年齢・男女比などの近いことが作用しているとしても、因子負荷量や因子から外れた項目までが同一であった。

質問項目	因子1	因子2	因子1 <sup>1)</sup>	因子2 <sup>1)</sup>
x11 気持ちはいつもさっぱりしている (R)	0.611	0.058	0.67	0.34
x20 日頃していることに満足している (R)	0.563	0.149	0.70	0.25
x18 生活はかなり充実している (R)	0.518	0.160	0.67	0.27
x12 いつもとかわりなく仕事をやれる (R)	0.505	0.122	0.67	0.17
x14 将来に希望がある (R)	0.420	0.012	0.55	-0.11
x17 役に立つ, 働ける人間だと思う (R)	0.403	-0.053	0.55	-0.08
x16 たやすく決断できる (R)	0.400	-0.040	0.57	0.00
x2 朝方はいちばん気分がよい (R)	0.339	0.022	0.35	0.12
x5 食欲はふつうだ (R)	0.310	0.083	0.35	0.15
x15 いつもよりいらいらする	0.153	0.563	0.18	0.65
x10 何となく疲れる	0.207	0.550	0.20	0.60
x1 気が沈んでゆううつだ	0.193	0.535	0.33	0.61
x9 ふだんよりも動き(胸がドキドキ)がする	-0.038	0.385	0.04	0.51
x19 自分が死んだほうが, 他の者は楽に暮らせると思う	0.067	0.352	0.20	0.43
x13 落ち着かず, じっとしてられない	-0.022	0.339	-0.06	0.52
x3 泣いたり, 泣きたくなる	0.102	0.332	-0.04	0.47
x4 夜よく眠れない	0.102	0.301	0.13	0.40
x7 やせてきたことに気がつく	-0.082	0.216	-0.06	0.25
x8 便秘している	-0.009	0.172	-0.06	0.34
x6 異性(自分が男なら女)と一緒にいると楽しい (R)	0.184	-0.199	0.33	-0.26
(R) は逆転項目			1)大谷ら(1999)	

## 5. 考察

本研究でも健常な高校生を被験者として SDS を実施した場合, やはり肯定的項目(認知項目)と否定的項目(感情項目)との2つの因子に分かれることを支持する結果となった。杉浦・丹野(1999)では, 健常な大学生を対象に SDS と STAI の項目を混合して, 「感情項目(STAI) + 認知項目(SDS)の肯定的な10項目」と「感情項目(SDS) + 認知項目(STAI)の否定的な10項目」と質問項目を混合して実施したところ, 「認知」と「感情」の2因子に分かれるよりも「肯定的」と「否定的」な2因子に分かれるほうが適合度指標が少し良い結果を得た。このような結果になることについては, 質問紙調査(問診型)の弱点というか限界点(尺度の自己評価であり, 質問表現の個人の理解

度差)であるのかもしれない。特に元気な健常者から見た SDS の質問項目は, 即断即答できそうな項目もあるため, 余計このような傾向が強く出そうである。このように考えると, 抑うつ症状を持つ被験者に対する SDS の実施結果で検討を加えたりすることも手段として考えられそうである。

### 【引用文献】

- 福田一彦・小林重雄(1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673-679.
- 川上憲人(2003). 厚生労働科学特別研究事業 平成14年度総括・分担研究報告書 心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究. 厚生労働省大臣官房統計情報部 2002 平成12年度保健福祉動向調査(心

身の健康).

- 1) 大谷 明・佐藤 学(1999). S D S の質問文の表現に関連した応答バイアスの検証 行動計量学, 26, 34-45.
- 更井啓介(1979). うつ状態の疫学調査 精神神経学雑誌, 81, 777-853.
- 杉浦義典・丹野義彦(1999). 抑うつ尺度の因子構造 性格心理学研究, 8, 72-73.
- Zung, W. W. K. (1965) A Self-Rating Depression Scale. Archives of General Psychiatry, 12, 63-70.